

# 『ハムレット』のフォーティンブラス\*

## ——材源研究<sup>(1)</sup>の方法論的一考察——

山 田 直 道

### はじめに

シェイクスピアは、多くの場合下敷用の材料を横に置きながら劇作の筆を進めたとされるが、一般的に作者が材源を他に仰いで劇を書く際は、依拠の度合の最も高い主材源の人物関係が織り成す筋書に乗りながら、更に他の素材を借りようと、或いは、自ら工夫しようとふと心が動いて主材源を離れる瞬間が、作者の創作意欲が強く働いた時なのではなかろうか<sup>(2)</sup>。主材源にみえる人物関係や筋書を変えたり、主材源にみえない人物関係や筋書、台詞の内容を作り出したりするなど、全体を通して依拠する主材源から逸脱するのは、何らかの動機に基づいていることは勿論のこと、何よりもその材源のその部分に劇作家が満足していないことの証であり、こうした変更や創造を行う時こそ劇作家の創作意図が最も明確に形成されている場合であろう。従って、主材源を逸脱した結果を綿密に調査分析し逸脱の理由を探ることで、劇作家の創作意図を推量することが可能となり、シェイクスピアの場合も、例えば主材源とは異なった登場人物や、主材源には見当たらない登場人物が他の登場人物とどのような関係に立ち、また、他の登場人物によってどう言及され、そしてそれに関連する筋書がどのような結果に至るかを、人物間の台詞の分析を通して細かく調査することにより、登場人物を変更あるいは創造する動機ないしは意図を探求できると考えられるのである。

勿論、このように主材源と劇とを比較して人物、筋書、内容の変更・創造を抽出し分析することだけでなく、主材源のまま残されている部分も当然ながら考察の対象になるだろう。なぜなら、その部分は全体的な創作意図に従って作者が取捨選択を行った結果、意図的に取り分けられ残されたと考えられるからであり、それゆえ作者の創作意図を追求する際には、主材源に沿う箇所もまた変更・創造部分と密接に関連づけ

て分析し考察することが不可欠となろう。

しかし、こうした考え方で主材源と比較しシェイクスピアの劇作意図を究明しようとする場合は、当然ながら、比較する両者をはっきりさせた上でなければならぬ。具体的には作者の書いた本文と作者が直接用いた材源が明瞭であることが必要となる。ところが、周知のごとくシェイクスピアの場合、大半の作品に材源は主材源を含め複数存在するとされているが、編纂本はもとより、substantive textも作品によって一種類から数種類にわたっているため、作品とその材源を比較する方法でシェイクスピアの劇作意図を考えると、どのテキストを選ぶかの問題は避けて通ることはできない。無論、書誌学的本文研究を踏まえ編纂されたテキストと材源との比較研究を通して、シェイクスピアの劇作意図を究明する試みはこれまで多くなされてきていることは事実であるが、そうした従来の研究とは異なり、テキスト編纂の基点である substantive textに戻りそれと比較することによって、より厳密な意味での作者の劇作意図を探る材源研究も可能となるであろう。

ところで、シェイクスピアはローマ劇を書く際にはプルタルコスの『英雄列伝』（ノース訳）に、歴史劇の場合にはホルの『ランカスター、ヨーク両名家の和合』やホリンシェットの『年代記』等に主な材料を仰いだが、そうした主材源がある場合は、作者の劇作意図はその材源と一種類のテキストであればそれと、複数のテキストであればそれらと比較することで推量が可能であろう。しかし直接用いたとされる主材源は伝わっていないがその元になった材源が存在する場合はどのように考えればよいのだろうか。その場合は、二次的にシェイクスピアと元の材源とを比較することになるが、しかしその際に、主材源の作者の意図によって変更・創造された部分が混入することになるだろう。だが、そうした変更・創造によってシェイクスピアの劇作意図に引き継がれると考えられる主材源の作者の創作意図は、最終的にはシェイクスピアの全体的な劇作意図に吸収されていると考えてよいだろう。なぜなら、シェイクスピアが自らの劇作意図に従って作品全体にわたり主材源を参照し、残そうと考えた部分は残し、変更や創造を加えようと考えた部分はそのようにした結果、主材源はシェイクスピアの劇作意図で全体的に作り換えられ、出来あがった作品はシェイクスピアが隅々までその責任を負っていると考えられるからである。即ち、直接の主材源が失われていても元の材源があれば、それとの比較によって作者の劇作意図を追求することが可能となるのである。

そこで、上で述べた劇作品と材源の関係性、とりわけテキスト間の相違と材源との関係において様々な問題を提起する『ハムレット』（推定創作年代 1600-01）を取り上

げ、材源とテキストの比較を通してシェイクスピアの劇作意図を考察してみたい。『ハムレット』の直接の主材源は、Kyd作と考えられ1594年6月に上演された *Ur-Hamlet* と呼ばれるもう一つのハムレット劇だとされているが、この戯曲は今日まで伝わっていない。しかし、セネカ流悲劇である Hamlet 劇へのナッシュの言及（1589年）や、ハムレットに復讐を迫る亡霊が登場する劇がシアター座で上演されたことを示すロッジの言葉（1596年）は、この劇が実在したことを証明している。そしてこの *Ur-Hamlet* の粉本として、Saxo Grammaticusによる *Historia Danica*（1514年出版）というデンマーク王列伝と、その伝語翻案である François de Belleforest による *Histoires Tragiques*（『悲劇物語』1570年出版）の第五巻があり、特にベルフォレはシェイクスピアも読んだ可能性が指摘されており、『ハムレット』に基本的な材料をより多く提供していることも事実である。又、ベルフォレの翻案については1608年に訳者不詳の英訳が出版されている<sup>(3)</sup>ことから、あるいはハムレット劇の舞台を観た者が英訳を思い立ったのではないかとも考えられているが、ハムレット劇の人気に結び付けられることが多いこの英訳の出版は、一歩進んで、人気を博している劇に筋書を提供した有力な材源としてその価値を認識したためであると考えられなくもないだろう。従って、シェイクスピアが『ハムレット』を書く際に主材源として用いたと考えられる *Ur-Hamlet* に素材を提供しているとされるベルフォレの物語を元の材源と考え、『ハムレット』と比較する対象としたい。一方、『ハムレット』には1603年出版のQ1、1604-5年出版のQ2、1623年出版のF1の三種類の substantive text があり、それぞれを材源のベルフォレと比較するテキストとして、作者の劇作意図を追求してみたい。

### (1)

『ハムレット』のQ1、Q2、F1のテキスト<sup>(4)</sup>とベルフォレの悲劇物語<sup>(5)</sup>とをそれぞれ比較し、前に述べたように材源を逸脱する程創作意欲が横溢した証であり結果でもある人物の創造に焦点を当てて見て行くと、シェイクスピアが亡霊、フォーティンブラス、旅役者、墓掘りなど、ベルフォレには登場しない人物を自ら考案していることが判明する<sup>(6)</sup>。勿論、この人物群のなかにはすでに *Ur-Hamlet* に登場し、シェイクスピアが自作の『ハムレット』に再登場させた人物—例えば亡霊がそうであるが—もいるかもしれないが、それもシェイクスピアが自らの創作意図のもとに登場させた創造人物となり意図の考察の対象となろう。そこで本稿では、最も古いハムレットの物語で

ありペルフォレが翻案の下敷きにしたサクソのアムレス物語にもみえず，作者が創造したことが明瞭な人物であるフォーティンブラスを取り上げ，サクソの記述をも参照しながら<sup>(7)</sup>，各テキストにおいて言及される場面や登場する場面でどう描かれているかを分析してみたい。

フォーティンブラスは<sup>(8)</sup>，亡霊が二度目に登場する前に，Horatioが発する台詞(Q1: B2r-B2v, Q2: B2v, F1: TLN 112-121)の中で初めて言及される：

Q1: *Hor*<sup>(9)</sup>.                   …

Now sir, yong Fortenbrasse,  
Of inaproued mettle hot and full,  
Hath in the skirts of *Norway* here and there,  
Sharkt vp a sight of lawlesse Resolutes  
For food and diet to some enterprise,  
That hath a stomacke in't: …

Q2: *Hora*.                   …

…; now Sir, young Fortinbrasse  
Of vnimproued mettle, hot and full,  
Hath in the skirts of *Norway* heere and there  
Sharkt vp a list of lawelesse resolutes  
For foode and diet to some enterprise  
That hath a stomacke in't, which is no other  
As it doth well appeare vnto our state  
But to recouer of vs by strong hand  
And tearmes compulsory, those foresaid lands  
So by his father lost; …

F1: *Hor*.                   …

… Now sir, young *Fortinbras*,  
Of vnimproued Mettle, hot and full,  
Hath in the skirts of *Norway*, heere and there,  
Shark'd vp a List of Landlesse Resolutes,  
For Foode and Diet, to some Enterprize

That hath a stomacke in't: which is no other  
 (And it doth well appeare vnto our State)  
 But to recouer of vs by strong hand  
 And termes Compulsatiue, those foresaid Lands  
 So by his Father lost: …

これは Hamlet 王と決闘を行い敗れた父が事前の約束に従い失った所領地を力づくで奪回しようと (Q2, F1) 血気盛んな息子フォーティンブラスが部下を集め、ノルウェー国境地帯で騒動を計画しているらしいとの情報 (Q1, Q2, F1) を伝える台詞であるが、ここで分かることは、ベルフォレでは野心家のノルウェー王 Collere (サクソでは Koll) と記述されているフォーティンブラスの父親は、シェイクスピアの Q1, Q2, F1 では各々 Fortenbrasse, Fortinbrasse, Fortinbras の呼び名で言及されているのだが、それだけでなく、ベルフォレやサクソに見えないノルウェー王の息子がそれぞれ young Fortenbrasse, young Fortinbrasse, young Fortinbras として更に登場していることである。即ち、ベルフォレは、勇敢なノルウェー王 Collere は略奪で名を馳せていたユトランド総督 Horvendile に武勲で先を越されるのではないかと危機感を持ち、自らの名誉を守るために Horvendile に挑み、敗者は船に積載する富を全て勝者に譲り、勝者は敗者の遺骸を立派に埋葬するという条件で決闘を行ったが敗北し、Horvendile が当時の儀礼に従い Collere を手厚く葬り、決闘の条件通り Collere の船の全ての富を獲得したと記述している。サクソは同じ箇所、ノルウェー王 Koll はユトランド総督である Horwendil に競争心を燃やし、そうとは知らない彼を積極的に探して二人だけで出会い、Horwendil に戦いの方法を問われるが、決闘が最良との若い Horwendil の考えに感心した Koll は、相手が死んだ場合は勝者が敗者の葬儀を立派に行い、重傷を負って生存し続ける場合には金貨 10 マルクを払うとの条件で決闘に合意し、決闘の結果 Horwendil が勝利を収め、約束通り Koll を国王にふさわしく葬ったと述べているだけなのである。従って、『ハムレット』の三つの版に見えるデンマークが抱えるフォーティンブラスの外患はシェイクスピアの創造となり、ここでシェイクスピアは、Horvendile に相当するハムレット王が、Collere に相当するノルウェー王フォーティンブラスの挑戦を受けて決闘で倒し、事前の契約通り相手の領地を獲得することに変更しただけでなく、騒動を企てようと無法者を集めたり (Q1)、失った土地を力づくで取り返す計画を実行するために、無法者を集めたり (Q2) 土地を失った者を集める (F1) 敗者の同名の息子を新たに加えていることになる。材源の

決闘条件は、敗者に対する立派な葬儀と負傷した場合の金貨10マルクであって所領地没収ではないのである。従ってシェイクスピアの『ハムレット』におけるハムレット王のノルウェー領獲得およびそれに対するフォーティンブラスの動きは、シェイクスピアによる変更と創造になると言えよう。

フォーティンブラスへの二度目の言及は、Claudiusが初めて舞台に登場したときの冒頭の台詞(Q1: B3r, Q2: B3v-B4r, F1: TLN 195, 200-203, 206-214)の中で次のように行われる:

Q1: *King* Lordes, we here haue writ to *Fortenbrasse*,  
Nephew to olde *Norway*, who impudent  
And bed-rid, scarcely heares of this his  
Nephews purpose: and Wee heere dispatch  
Yong good *Cornelia*, and you *Voltemar*  
For bearers of these greetings to olde  
*Norway*, ...

Q2: *Claud*. ...  
Now followes that you knowe young *Fortinbrasse*,  
...  
He hath not faild to pestur vs with message  
Importing the surrender of those lands  
Lost by his father, with all bands\* of lawe (Bonds *F1*)  
To our most valiant brother, so much for him:  
...  
..., we haue heere writ  
To *Norway* Vncle of young *Fortenbrasse*  
Who impotent and bedred scarcely heares  
Of this his Nephewes purpose; to suppress  
His further gate heerein, in that the leuies,  
The lists, and full proportions are all made  
Out of his subiect, and we heere dispatch  
You good *Cornelius*, and you *Valtemand*,  
For bearers\* of this greeting to old *Norway*, (bearing *F1*)

...

ベルフォレでは、兄の Horvendile を殺害する前から密かに妃 Geruth と通じていた弟 Fengon は、兄の危害から妃を守ろうとして兄を殺したことを主張し、サクソでも、Feng は兄の Horwendil 殺しを宮廷で公然化し、殺害したのは妃を兄から救うためであったと弁明に努めるが、引用からも分かるように (F1 からの引用を省略する場合は、代わりに、内容に係わる<sup>(10)</sup>F1 の主な variants を Q2 の該当する語に \* を付して Q2 の右余白に記す—以下同じ)、Q2 と F1 のクロードias王は、この場面で兄殺しをひた隠しにし、兄王の死を悼みつつ Gertrude との結婚を感謝をもって報告し、引き続き現下の国政の遂行に邁進する姿をみせ、まず、兄王が正当に得た土地の返還をフォーティンブラスが要求してきたことを伝えるのだが、Q1 の国王は具体的なフォーティンブラスの要求も含めこの部分を全てカットしているのである。Q2 と F1 における言及者はクロードiasであるが、材源に見えないこのフォーティンブラスに関する部分は、最初のホレイシオによる言及から一步進み、彼の要求が推測ではなく事実として父親が失った土地の引き渡しであることを示しており、材源から離れてフォーティンブラスを創造し、その土地返還要求を更に創造したシェイクスピアは、実際の要求を確定的な事実として再び創造していることになろう。引き続きクロードiasは、フォーティンブラスが、病床に伏している叔父のノルウェー王の知らないところで (Q1, Q2, F1) 臣民を軍に徴用しこの計画を実行しようとしていると考え (Q2, F1)、ノルウェー王に書簡を送り (Q2, F1) フォーティンブラスの計画中止を求めることを明らかにする (Q1, Q2, F1) が、この国王の書簡を届ける二人の使者も又フォーティンブラスの創造に付随するシェイクスピアの創造となるのである。

次にフォーティンブラスが話題に上るのは、シェイクスピアの考案したこれらの使者がノルウェーから帰国し、クロードias王に報告が行われる場面 (Q1: D3v, Q2: E3v, F1: TLN 1086-1105) である:

Q1: *Volt.*

...

Vpon our first he sent forth\* to suppresse (out Q2, F1)

His nephews leuies, which to him appear'd

To be a preparation gainst the Polacke\*: (Poleak F1)

But better look't into, he truely found

It was against your Highnesse, whereat grieved,

That so his sickenesse, age, and impotence,

Was falsely borne\* in hand, sends out arrests (borne Q2, F1)  
 On *Fortenbrasse*, which he in briefe obays,  
 Receiues rebuke from *Norway*: and in fine,  
 Makes vow before his vncler, neuer more  
 To giue the assay of Armes against your Maiestie,  
 Whereon olde *Norway* ouercome with ioy,  
 Giues him three thousand\* crownes in annuall fee, (threescore Q2)  
 And his Commission to employ those souldiers,  
 So leui'd as before, against the Polacke\*, (Poleak F1)  
 With an intreaty heerein further shewne,  
 That it would\* please you to giue quiet passe (might Q2, F1)  
 Through your dominions, for that\* enterprise (this Q2, his F1)  
 On such regards of safety and allowances  
 As therein are set downe.

甥のフォーティンブラスが計画する募兵がポーランドに対してではなくデンマーク王に対するものであると知ったノルウェー王がそれを嘆いて計画の中止命令を出したこと、そしてフォーティンブラスはそれに従いデンマーク王に対して二度と兵を動かさないことを誓ったこと、ノルウェー王はそれを喜び、彼に年金を与え、集めた軍勢をポーランド討伐に向けることを許したことを使者は報告し、更に、フォーティンブラスがポーランドに遠征する際にデンマーク領内を通行する許可を得たいとのノルウェー王からの書簡をクロディアスに渡す (Q1, Q2, F1) が、こうしたフォーティンブラスに関するほぼ同一 (内容に係わる Q2, F1 の主な variants を Q1 の該当する語に\*を付し右余白に記す) の台詞の創造された内容は、そのままフォーティンブラスがポーランド遠征の途中にデンマーク領を通過する場面 (Q1: G4v, Q2: K3r-K3v, F1: TLN 2735-2743) へと引き継がれて行く:

Q1: *Fort.* Captaine, from vs goe greete

The king of Denmarke:

Tell him that *Fortenbrasse* nephew to old *Norway*,

Craues a free passe and conduct ouer his land,

According to the Articles agreed on:

You know our Randevous, goe march away. *exeunt all.*



Q2: *Fortin.* Goe Captaine, from me greet the Danish King,  
 Tell him, that by his lycence *Fortinbrasse*  
 Craues\* the conueyance of a promisd march (Claimes *F1*)  
 Ouer his kingdome, you know the randeuous,  
 If that his Maiestie would ought with vs,  
 We shall expresse our dutie in his eye,  
 And let him know so.  
*Cap.* I will doo't my Lord.  
*For.* Goe softly\* on. (safely, *Exit F1*)

ト書とともに、これまで言及されるだけであったフォーティンブラスが初めて舞台に登場し、デンマーク王への挨拶と以前約束した軍の領内通過の裁可を仰ぐよう(Q1, Q2, F1)、また仮にデンマーク王が望むなら敬意をもって会うことを伝えるよう(Q2, F1) 隊長に命じた後退場し、創造人物の一人である隊長とハムレットの22行の対話、Rosencrantz とハムレットの2行の対話、そして35行にわたるハムレットの独白へと場面は続く(Q2)のである。フォーティンブラスの隊長への命令は、以前デンマーク領内の自由で安全な通行の許可をノルウェー王から要請され帰国してクロードゥアス王に報告した使者の筋書きの延長線上にあるが、Q2 だけに見られる一人残った隊長とハムレットの以下の対話(Q2: K3r):

Q2: *Ham.* How purposd sir I pray you?  
*Cap.* Against some part of *Poland*.  
*Ham.* Who commaunds them sir?  
*Cap.* The Nephew to old *Norway*. *Fortenbrasse*.  
*Ham.* Goes it against the maine of *Poland* sir.  
 Or for some frontire?  
*Cap.* Truly to speake, and with no addition,  
 We goe to gaine a little patch of ground  
 That hath in it no profit but the name

...

によって、フォーティンブラスの進軍の目的はポーランドの「利益のない名誉がかかるだけのわずかな土地」を獲得することであることが判明する。そしてそれに続く第

四独白の中 (Q2: K3v) でハムレットは、

Q2: *Ham.* ... , while to my shame I see  
 The imminent death of twenty thousand men,  
 That for a fantasie and tricke of fame  
 Goe to their graues like beds, fight for a plot  
 Whereon the numbers cannot try the cause,  
 Which is not tombe enough and continent  
 To hide the slaine, ...

と述べて、二万名の軍勢を率いるフォーティンブラスが、争う価値もなく戦死者をも葬れない僅かな土地のために戦う人物であることを明らかにしている。勿論、Q2だけにみられる第四独白は、軍を進め退場したばかりのフォーティンブラスにわが身を引き比べたハムレットが、自らの腑甲斐なさに苛立ち、自身を復讐へと奮い立たせようとしている独白なのであるが、そのハムレットからフォーティンブラスに目を転じると、そこには、ハムレットとは対比的に、土地獲得に執念を燃やし目的と行動の一致したフォーティンブラスの人物像が鮮やかに浮かび上がってくるのである。

最後にフォーティンブラスが言及され登場するのはこの劇の最終場面 (Q1: I4r, Q2: O1v, O2r, F1: TLN 3839-3841, 3844-3846, 3855-3860, 3882-3887) である：

Q1: ...  
*Fort.* Where is this bloody sight?  
*Hor.* If aught of woe or wonder you'd behold,  
 Then looke vpon this tragicke spectacle.  
*Fort.* O imperious death! how many Princes  
 Hast thou at one draft bloudily shot to death?  
 ...  
*Fort.* I haue some rights of memory to this kingdome,  
 Which now to claime my leisure doth inuite mee:  
 ...

Q2: *Osr.* Young *Fortenbrasse* with conquest come from Poland,  
 To th'embassadors of *England* giues this warlike volly.  
*Ham.* O I die *Horatio*,

...

But I doe prophecie th'ellection lights  
 On *Fortinbrasse*, he has my dying voyce,  
 So tell him, ...

...

*For.* Where is this sight?

*Hora.* What is it you would see?

If ought of woe, or wonder, cease your search.

*For.* This\* quarry cries on hauock, ô prou'd death (His *F1*)

What feast is toward in thine eternall cell,

That thou so many Princes at a shot\* (shoote *F1*)

So bloudily hast strook?

...

*For.* Let vs hast to heare it,

And call the noblest to the audience,

For me, with sorrowe I embrace my fortune,

I haue some rights\*, of memory in this kingdome, (Rites *F1*)

Which now\* to claime my vantage doth inuite me. (are *F1*)

ここでフォーティンブラスは、ポーランドとの戦いに勝利を収め、帰路デンマーク領内を通過中ハムレットによりデンマーク王に推されるが (Q2, F1), そうとは知らずに宮廷に参内し、デンマークの王位が空位である今こそ好運とばかりにデンマークに対する忘れることのない権利を主張するのである。これは、たまたま直後のホレイシオの台詞で示されるハムレットの国王推挙と一致するが、フォーティンブラスの要求はそれ以前であり、従って、ポーランド戦に勝利を収めて土地を占領し、ハムレットによりデンマークの国王に推されたとは知らずにデンマークの宮廷で権利の要求を行なうフォーティンブラスは、土地に執着する人物像を堅持しながら国王としてデンマーク領を手中に収めることになるのである。即ち、これまでホレイシオやクロードディアスの言及にみてきた通り、ノルウェー王であった父親が失った土地を回復しようとデンマークに対して起した行動を叔父に差し止められたフォーティンブラスが、この忘れがたい権利の要求をこの機会にデンマークに対して再度行なおうとした (Q1, Q2, F1) と考えられ、その要求は自らデンマーク王となることによって実質的に満た

されることになるのである。

この様に、材源にないフォーティンブラスが Q1, Q2, F1 の中でどのように描かれているかを全編にわたり見てきたが、そこには、目的を持って騒動を計画したり、父の失った土地を引き渡すようデンマークに要求したり、実際に勝利を収めてポーランドから土地を獲得したり、領土に係わる忘れ難い権利をデンマークに対し主張したりするなど、土地というものに執着するフォーティンブラスが創造されていることが判明する。だが、こうしたフォーティンブラスの創造にも三つの版本の間で内容と程度に差があるのであり、次にこれを吟味しなければならない。

(2)

前述した通り、Q1において、ノルウェー王がハムレット王との決闘により土地を失ったというホレイシオの説明は Q2, F1 とほぼ同じであるが、その後のフォーティンブラスの行動について、「何かの企て」(some enterprise) のために、多くの「無法者」(lawlesse Resolutes) を国境付近に集めていることをホレイシオは述べるのみで、Q2, F1 で推量されている父の失った土地を力づくで奪還するという目的は見当たらない。続いて国王の演説の場面では、Q1 の王は「甥の目的」とは言うものの、Q2, F1 とは異なり、フォーティンブラスがハムレット王死去に乗ずるかのよう土地の返還を要求してきていることについては全く触れていないのである。使者をノルウェーに派遣するくだりは、甥のフォーティンブラスの計画を差し止めるよう要請する手紙を病床のノルウェー王宛に書き使者に渡す Q2, F1 に対し、Q1 は、病床に伏し甥の騒動目的を知らないノルウェー王に、フォーティンブラス宛に書いた手紙を渡すよう使者に命ずる内容となっており<sup>(11)</sup>、又、Q2, F1 とは異なり、Q1 には国王の民に対して募兵が行われているという部分が欠落しているのである。次に、使者が帰国報告する場面では、年金額が Q2 の 6 万クラウンに対して F1 と同じ 3 千クラウンであり、二箇所副詞、助動詞が異なる以外は Q2, F1 とほぼ同一の台詞であり、ノルウェー王による募兵差し止めの決定は、Q2, F1 同様そのまま Q1 でも報告されるのである。前述したように、計画中止を要請するため使者を派遣する国王の演説において Q1 は募兵部分を含まず、従ってそれは使者の帰国報告に一本化され、文言もこの部分だけ Q2, F1 と同じで唐突感は免れず<sup>(12)</sup>、Q2, F1 に見られる要請、受諾の因果律が欠けていると言えるだろう。更に、ポーランド遠征の途上交わされるフォーティンブラスと隊長の対話は、Q2, F1 と同じくデンマーク国王に対し領内をノルウェー軍が自由かつ安全

に通行できるよう裁可を求める内容で、上の報告内容の忠実な舞台化となっているが、それに続くフォーティンブラスの土地執着を示すハムレットと隊長の対話及び第四独白がQ1では全て欠落しており、又、ハムレットが死を迎える最後の場面では、Q2、F1とは異なりハムレットはフォーティンブラスに言及せず、死後登場したフォーティンブラスが、Q2、F1と同じようにデンマークに対し自らの権利を主張して劇の幕は下りるのである。このように、Q1全体のフォーティンブラスの土地執着は、Q2、F1と異なり失地の返還要求をデンマークに突き付けず、Q2、F1同様、計画の中止に至る経緯は詳しく報告され、Q2とは違って僅かな土地の獲得に命を賭ける人物に見えないなど、行動面で不明瞭さが残るだけでなく、反デンマークの目的や計画も、その中身が具体的に示されないため、父親が土地を失ったことで無法者を駆り集めたり、最後にデンマークに対し権利要求を行うとはいえ、かなり微弱で曖昧なものとなっていると言えよう。

それではQ2におけるフォーティンブラスの土地執着はどのようなものであろうか。前述したように、血気盛んなフォーティンブラスが無法者を多数集めて何かを企てていること、その目的は推測とはいえ父親が失った領地を奪回することにあることがホレイシオを通して明らかとなる。ノルウェー王が決闘でハムレット王に敗れ領地を失った経緯は、Q1同様ホレイシオによって直前に説明されており、従ってフォーティンブラスの企ての目的が明示されていないQ1とは異なり、Q2は領地を奪われたので奪い返そうとするフォーティンブラスの行動の動機と目的が明確に描かれている。引き続き、ホレイシオの予想通りフォーティンブラスが使者を送り土地の返却をデンマークに要求してきたことがクロードィアスの演説で明らかになるが、その土地が現在デンマーク領となっている経緯もQ1とは異なりクロードィアスによって説明されており、最初のホレイシオの言及との連続性が見て取れる。更にクロードィアスは二人の使者を病床のノルウェー王の許に送り、フォーティンブラスの計画を中止させるよう要請する親書を渡すことにするが、これはそのまま使者の帰国と報告の場面へと緊密に連なり、親書を読んで事の次第に驚いたノルウェー王がフォーティンブラスの計画の差し止めを命じ、反デンマークの兵を動かさないよう誓約させ、年金を下賜し、集めた兵をポーランド討伐に振り向ける権限を与えたことが報告される。即ち、Q1とは異なりQ2は、募兵の情報をデンマーク王の書簡で伝えられ真相を知ったノルウェー王がフォーティンブラスの計画を中止させるのであり、ここでもフォーティンブラスに言及する前後の筋書間の緊密な連続性が維持されているのである。そしてこの報告の後半部分にあたるデンマーク領土内の安全な通過許可の要請はそのままフォーテ

インブラス本人の登場する場面へと連続する。フォーティンブラスの発する「約束の進軍」(a promised march) という言葉が報告の場面と進軍の場面との連続性を強く意識させるのであり、更に Q2 のみの隊長の言葉からポーランド討伐が小土地の獲得を目的としていることが判明する。ここでフォーティンブラスはデンマークに奪われた領地を奪回する目的で集めた兵士をポーランドから土地を獲得するために率いているのであり、土地の獲得という目的は最初から一貫していると言えよう。それに続く Q2 のみの第四独白も、前に述べたように目をハムレットからフォーティンブラスに転じれば、フォーティンブラスの飽くなき土地執着を一層強調しており、更に劇の最後の場面では、フォーティンブラスのデンマークに対する権利要求に対し、ホレイシオは、フォーティンブラスをデンマーク国王に推戴したハムレットの死ぬ直前の言葉を踏まえ応じているのであり、フォーティンブラスは最終的にデンマーク王に即位し父王の失った土地を含めデンマークの領土を獲得することが予定されるのである。このように Q2 におけるフォーティンブラスの土地執着は、言及され登場する五箇所の連続性に促され、隙のない事件の緻密な因果律に支配されながら、生起し発展し展開し終息する一貫した筋書そのものとなっていると言えよう。

最後に F1 におけるフォーティンブラスを考察してみよう。引用（或いは、引用の省略）でも明らかなように F1 の本文が Q1 の本文より圧倒的に Q2 の本文に近いため、上で述べた Q2 のフォーティンブラスの土地執着が二箇所を除いて F1 のフォーティンブラスの土地執着にそのまま当てはまる。その二箇所とは、前に述べた通り最初の言及において、フォーティンブラスが国境付近にかき集める部下が、Q1、Q2 の「無法 (lawlesse, lawelesse) 者」とは異なり、F1 は「土地を持たない (Landlesse) 者」となっている部分と、隊長とハムレットの対話及び第四独白が F1 からすっぱり抜け落ちている箇所<sup>(13)</sup>である。前者はノルウェー王が決闘で敗れ土地を失ったフォーティンブラスと同じ境遇にある部下で、土地に執着するノルウェー国民から集められ、規律正しい部隊としてフォーティンブラスに率いられ僅かな土地を取ろうとポーランドに遠征する途中デンマーク領を通過する兵士であるために、F1 の Landlesse はフォーティンブラスの土地執着に合致していると考えられる。一方後者は逆にフォーティンブラスの土地獲得にこだわる人物像に一致しその人物像を一層強調する部分が欠落していることになり、それによって F1 のフォーティンブラスは Q2 に比べ土地獲得の一貫性の点で後退した印象を与えるのである。従って、前者はフォーティンブラスの土地執着に沿った本文となっており、後者はその点に触れない本文となっているところから、F1 のフォーティンブラスは全体としては土地に執着しな

がらも、Q2のようにポーランドの土地獲得に執着せず、ただ反デンマークを目的に集めた兵士をポーランドとの戦いに振り向け進軍するだけの人物として描かれていると言えよう。

### おわりに

このように、『ハムレット』の substantive text である Q1, Q2, F1 のフォーティンブラスの描き方を比較考量した結果、作者シェイクスピアは材源のペルフォレを逸脱して土地に執着するフォーティンブラスを創造していることが判明する。だがしかし、各版本の本文を更に詳しく検討すると、同じフォーティンブラスの創造でも版本間で微妙な差があることに気付かされるのである。フォーティンブラスが、父親の失った領地の回復を目指して辺境から行動を起し最終的にデンマークの宮廷に乗り込み権利を要求するまで一貫して土地にこだわる登場人物として創造されている Q2 は、最も作者の創作意図に沿った版本と言えるだろう<sup>(14)</sup>。隊長とハムレットの対話及び第四独白が見当たらない以外は Q2 と同じで、動機を同じくする部下とともに行動するフォーティンブラスが新たに創造されている F1 は、Q2 程ではないが、やはりシェイクスピアの創作意図に沿う版本と言えるだろう。そして、フォーティンブラスの土地執着が微弱な Q1 は、作者の創作意図に十分沿う版本とは言えないのである。

### 註

\*本稿は、1998年10月、東京大学駒場キャンパスにおいて開催された第37回シェイクスピア学会での口頭発表(表題:『ハムレット』のフォーティンブラス—典拠, 作者の意図, そして本文—)の草稿を大幅に書き改めたものである。

1. 二十世紀前半からの source-study の概要については、拙論 ‘Two Tragedies in Harmony in *Julius Caesar*—Shakespeare’s Reinterpretation of Plutarch—’ (*Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*, Vol. 27, No. 1. Tokyo: The Hitotsubashi Academy, 1986), pp. 1-3 参照。
2. 主材源のもつ意味と作者の劇作意図を考察する方法については、上掲論文 pp. 4-6 参照。
3. Bullough, Geoffrey, ed. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. VII. (London: Routledge and Kegan Paul, New York: Columbia University Press, 1973), pp. 81-124.
4. 使用テキストは、*Hamlet* First Quarto, 1603 (Shakespeare Quarto Facsimiles no. 7,

- With an introductory note* by W. W. Greg. London: The Shakespeare Association & Sidgwick and Jackson Limited, 1951), *Hamlet* Second Quarto 1604-5 (Shakespeare Quartos in Collotype Facsimile Number 4. London: The Shakespeare Association, Sidgwick and Jackson Ltd, 1940), 及び Hinman, Charlton, and Peter W. M. Blayney, eds. *The Norton Facsimile Edition: The First Folio of Shakespeare*. 2nd ed. (New York, London: W·W·Norton Company, 1996). 尚, Bertram, Paul, and Bernice W. Kliman, eds. *The Three-Text 'Hamlet': Parallel Texts of the First and Second Quartos and First Folio*. (New York: AMS Press, 1991) を適宜参照した。
5. 使用テキストは Gollancz, Sir Israel. *Histoires Tragiques and The Historie of Hamlet*. (*The Sources of Hamlet*. (London: Oxford University Press, 1926), pp. 166-311).
  6. 主人公の恋人役や友人役など、役柄に該当する人物や、異なる場面に登場する類似した人物はこの創造された人物群には含めていない。
  7. 使用テキストは Gollancz による上掲書の pp. 93-163 に収められている Oliver Elton 訳。
  8. McGuire はフォーティンブラスを正面から取り上げ、各版本の異同を言及・登場の全ての箇所を調査し、ハムレットの 'foil' であるフォーティンブラスがそれぞれ異なるため、『ハムレット』も三通りとなり、劇の終わり方も三様であると論じる。McGuire, Philip C. 'Which Fortinbras, Which 'Hamlet'?'. (Clayton, Thomas, ed. *The 'Hamlet' First Published (Q1, 1603) Origins, Form, Intertextualities*. (Newark: University of Delaware Press, 1992), pp. 151-178).
  9. 引用中の long s は現代綴化した。
  10. 綴り、句読法の異同等は割愛した。
  11. Irace は、Q1 の国王はフォーティンブラスとノルウェー王の二人に手紙を書いたように見えると言う。Irace, Kathleen O. *The First Quarto of Hamlet*. (Cambridge: Cambridge University Press, 1998), p. 95, Textual Notes.
  12. ヴォルティマンドが Q1 の actor-reporter の一人に擬せられる根拠となっている箇所。
  13. G. R. Hibbard は、このカットはアクション進行に役立たず主人公に新味も加えないためだと言う。Hibbard, G. R., ed. *Hamlet*. (Oxford, New York: Methuen, 1982), p. 172, Notes.
  14. フォーティンブラスの筋書に限って見た場合、最もシェイクスピアの劇作意図に近いと考えられる理念上のテキストは、'lawlesse' を 'Landlesse' に差し替えた Q2 のテキストということになるのかもしれない。